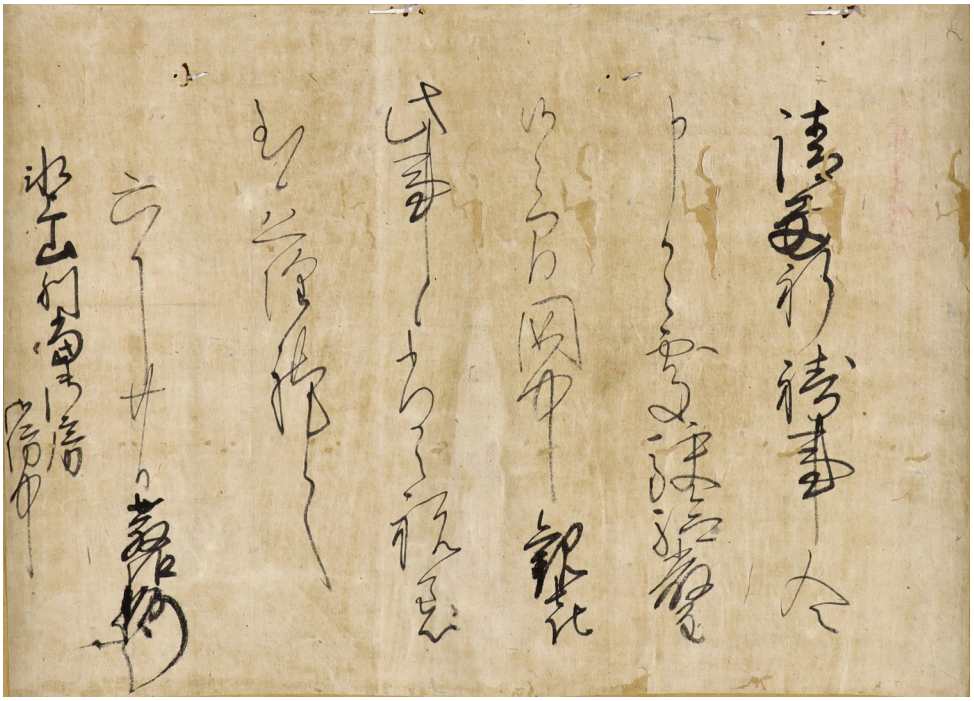
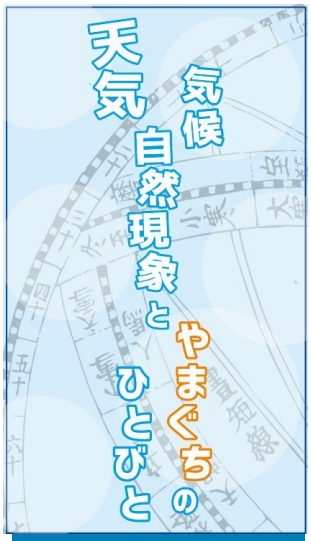


大内教弘書状(興隆寺文書26-7)



01

天気 ①

大内氏と天気(1)

《室町時代の自然現象》

室町時代を生きた人々の営みと、天気・気候・自然現象は、まったく無関係なものではありませんでした。

当時の史料を眺めてみると、当日の天気の情報が書き込まれていることは珍しくありません。とくに日記の場合、地震や台風、さらには彗星(すいせい)のことなどが記載されることもありました。

しかし、当時の人々はそうした自然現象を現代のように科学的に理解していたわけではありません。その代わりに、彼らは神仏に祈りを捧げることで加護を得て、安全を確保しようとしました。

《大内氏の雨乞い》

大内氏の氏寺・氷上山興隆寺に伝わった「興隆寺文書」には、わずかに天気や自然現象に関する記述が確認できます。その中には、大内氏の雨乞いと待望の雨に歓喜する人々の姿をみることができます。

上の書状によると、どうやら「国中」＝周防国(長門国も？)では、雨の降らない日が続いていたようです(翻刻は裏面)。

この書状が書かれた旧暦6月は、新暦ではおおむね7・8月(夏季)に相当します。飲料水の確保はもちろんのこと、農業では水の管理に気を付ける必要がありました。

そこで大内教弘は、雨を降らせるために「請雨祈祷」、いわゆる雨乞いの祈祷を興隆寺に依頼しました。

念ずれば通ずなのか、それともタイミングが良かったのかわかりませんが、祈祷は功を奏し、大内氏は渇水という国を揺るがす危機を脱したのでした。

興隆寺文書
(興隆寺1~28)

氷上山興隆寺は、大内氏の氏寺です。大内氏当主の菩提寺は曹洞宗・臨済宗といった禅宗で占められますが、興隆寺は天台宗です。

興隆寺に伝わった「興隆寺文書」には、他の寺院にはみられない宗教行事についての文書が多数収められています。大内氏を知る上では欠かせない重要な文書群です。

《誠にもって相叶う神慮を見たり》

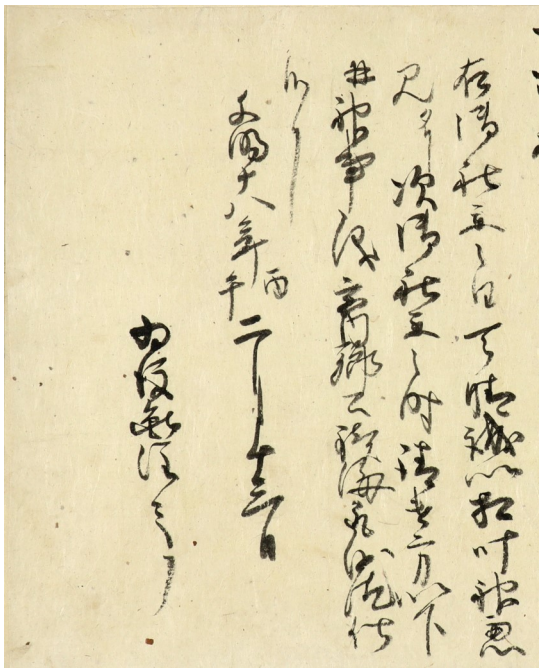
大内教弘は、子・政弘の幼名に「亀童丸」と名付けました。「亀童丸」とは、大内氏が信仰した妙見菩薩そのものと考えられています(第10回中国四国アーカイブズウィーク「書庫に棲む動物たち」解説シート①参照)。これを名乗らせるということは、次期大内氏当主が約束されていることを意味しています。

政弘もまた、子・義興を「亀童丸」と命名し、次期当主として彼を確立したのでした。しかし、「亀童丸」が大内氏当主となるためには、「亀童丸」を名乗るだけでは十分ではありません。もうひとつの、ある通過儀礼がありました。

それは、大内氏の聖域である妙見上宮(現山口市大内氷上)に参詣するというものです。政弘は14歳、義興は10歳の時に妙見上宮に参詣しました。参詣は2月1日に始まり、同13日に終わります(政弘の時は7日まで)。この期間は、興隆寺の宗教行事「二月会(にがつえ)」の開催期間と重なります。「二月会」は、大内氏領国全体を挙げて開催される宗教行事で、とくに2月13日は、「二月会」の最終日であり、翌年の同行事にかかる役を籤引きで決定する日でもありましたから、最も盛り上がる日といえます。

きっと大方がこの期間の快晴を願ったはずです。願いは通じたのか、この期間は見事に晴れ渡り、人々は「誠にもって相叶う神慮を見タ」のでした。

右御社参之点晴、誠以相叶神慮
見タリ、次御社参之時、請遣方以下
（カ）
并神事儀、宮内卿公鏡海取沙汰仕
候了、
（一四八六）
文明十八年丙午二月十三日
為後亀注之了



多々良亀童丸（大内義興）上宮社参目録 「興隆寺文書」(興隆寺文書9-2)

請雨祈祷事令
（効）
申候之処、駿験厳重
候之間、国中歓喜
此事候、尚々祝着
至候、恐惶謹言、
六月廿日　教弘（花押）
氷上山別当御房
御坊中

大内教弘書状 「興隆寺文書」(興隆寺文書26-7)